



●成長意欲あふれる会員企業をリポート！

充填機から容器までを 手掛けることで、 継続的な販売ルートを確保。

備南工業株式会社 代表取締役社長○小坂 章則
(もみじ銀行 もみじビジネスクラブ)



「製品のアイデアは、皆で出しあっています。全員開発、全員製造、全員販売といったところでしょうか」と語る小坂章則社長

瓶洗浄の技術を活かして充填機メーカーに転身した備南工業は、食品メーカーの細かな要望に応えて、独自技術を磨いてきた。工場の海外流出が続くなか、アジア、中東向けにも完成品の輸出を伸ばしている。

写真：吉田 三郎

広島県福山市、瀬戸内工業地域の一隅で、飲料・食品向けポリエチレン容器と充填機の開発・製造を手掛ける備南工業。同社の製品には我々にとつて、なじみ深いものが並ぶ。

細長いポリエチレン製容器に入ったジュースで、冷凍するとアイスにもなる通称「チューチュー」や、メロン型容器に入ったシャーベット、西日本でよくみられる筒型豆腐。これら、おなじみの容器が備南工業で生産されている。

同社は1947年に創業。55年からは、サイダーやラムネ瓶の洗浄機の製造を手掛けるようになった。しかし、60年代に入り、外資系大手飲料メーカーが進出すると、ラムネの需要は激減する。「機械の販売先であった、いわゆる街の飲料水屋さんが相次いで倒産し、当社も生き残りのため、新たな展開をせまられることになりました」そこで、細い管から液体を噴射する瓶洗浄の技術を活かし、同社は、飲料

や豆腐といった食品をポリエチレン製容器に充填する、食品充填機メーカーとして、新たなスタートを切った。そして、各食品メーカーの細かな要望にあわせた充填機の開発を進めていった。

同社の充填機の大々な特徴は、1時間に最高約1万本の充填をこなす効率性と、そして、真空にしながらかつ、中身を1滴もこぼさずに密封できる点だ。

「通常の中身をこぼしながら充填する方法に比べ、衛生的で、より長期の保存が可能となります」

現在、同社のポリ飲料・豆腐用充填機の国内シェアはいずれも90%以上と、

ほぼ独占的だ。当初は充填機のみを手掛けていたが、次第に、専用ポリエチレン容器の製造も手掛けるようになった。現在、同社の売り上げに占める充填機と容器の割合は4対6になっている。「じつは、充填機とポリ容器製造機はまったく異なる技術の機械ですから、1社で両方を手掛けていたケースはまれです。海外でも数社、国内では当社のみです」しかし、充填機と容器の両方を手掛けるメリットは非常に大きいという。「充填機と専用のポリ容器をセット販売することで、充填機納入後も継続的に、容器を販売することができ

地方発 元気企業



ます」

通年向け商品開発にも力を入れる

冒頭紹介のように、同社ではさまざまなポリエチレン容器を製造しているが、冷菓向けが7割を占め、その需要は約4カ月間に集中する。それが大手が参入しにくい理由でもあるが、「通年向け商品の開発にも、現在、力を入れていく」という。

「介護用流動食の容器なども開発していますが、いま、とくに力を入れているのが、豆乳向けの容器です」健康志向の高まりと製造技術の進歩による味の向上で、豆乳の需要が増えている。今回のブームは20年前の一

過性のものとは異なり、定着するとの見方も強い。そこで、同社では豆乳向け新容器を開発し、専用充填機とセットでの販売をスタートさせた。

「豆乳は容器封入後の高温殺菌が不可欠なため、我々が得意としている、蓋まですべて同一素材の、一体成型によるボトルが適しているのです」

誰にでも開けやすく、飲みやすい開口部の開発にはまる1年がかかった。そして、試行錯誤の末、ポリ容器にはいままで見られなかったプルトップ型で、底から中身を充填するタイプの新容器が完成した。専用充填機の価格は小型のもので、300万円、大型のもので2000万円ほど。高級志向のこだわり豆腐を製造するメーカー向けに販売されている。

また、今後積極的に開拓していきたいと考えているのが、シャンプー、リンスなどの詰め替え用ボトルの市場だ。現状の詰め替え用に多いスタンディングパウチの場合、販売店で陳列される際、よい棚どりが難しい点に目をつけた。「シャンプーなどの場合、成



さまざまな容器を製造している。冷菓向けが7割を占めるが、最近では、豆乳用、介護用、ペットフード用など、新商品の開発にも力を入れている

【備南工業株式会社】
業務内容/ポリ飲料・プロ-王子豆腐・充填豆腐製造機械、各種自動化機械、ポリエチレン製中空成型プロ-容器成型機の設計・販売、ポリエチレン製飲料水・豆腐用中空成型プロ-容器の製造販売
創業/1947年
所在地/〒721-0951 広島県福山市新浜町1-2-7
☎084-953-7788
資本金/1500万円
従業員数/17名
売上高/7億9000万円(04年12月期)

分的にもポリエチレンを多層構造にするなど、手間が必要ですが、高級感を生かした商品の詰め替え用ボトルとして、陳列がしやすく、輸送にも便利な形状のポリエチレン容器の普及を狙っていきたく考えています」

思いもよらない国から注文が

生産拠点を海外に移す動きが多いなか、同社では、逆に、海外向けに、ポリ容器製造機と充填機を直結させたプラントの輸出を伸ばしている。販売先は中国を中心に、東南アジア、ヨルダン、メキシコ、アメリカなど、多地域にわたる。

「当社の機械の中古品が海外に流れしており、そのネームプレートを見た思いもよらない国の企業から、突然新品

の注文が入ってくることもありま

す。樹脂メーカーとも共同で開発を進めており、同社のほうから食品メーカーに新商品のアイデアを提案するケースも増えているという。この夏の赤城乳業(埼玉)の新作アイス「シャリシャリ君」用に、同社では、新タイプのアイス容器を開発、大ヒットした。これまでアロ-容器入りアイスでは難しかった開口部を広くとることに成功し、取っ手をつけて開けやすくするなど、食べやすい工夫を重ねた。しかし、「少子化による市場の縮小で、ピーク時に1シーズン15億本生産していた「チューチュー」容器も、いまは半分以下になっています。今後はさらに新用途の開発を進め、新たなニーズを発掘していきたい、そう考えています」。

(上写真)人の目で1つひとつ製品をチェックする
(左上写真)冷菓用ポリエチレン容器を成型するマシン。成型のさいに出たポリエチレンの余り部分は、その場で粉砕し、すぐにリサイクルされるため、廃棄はゼロに近い
(左下写真)高速で次々と成型される容器。同社の中古機械が海外に出回っており、機械に貼られたネームプレートを見た、思いもよらない国の企業から突然新品の注文が入ることもあるという

